書きぞめ

原子朗

文芸論叢に短文をもとめられたのは名誉なことなのに、今回は失礼して随想をつづらせていただかうといふ魂胆であります。といふのも、書きたいと思ふ学術的なテーマのいくつかが、とても短文にをさまりさうもないからで。

文芸論叢も十二号を迎へたわけですが、文芸科創設の二年目に創刊されたから、学科創設からは早や満十三年を閲したことになります。十年もひと区切りなら、十三年も仏教ではひと区切り。さしあたり、死者なら十三回忌でそろそろ忘れかけられる時期、生者なら物ごころつきはじめ、ガキではなくなる時期であります。盛装した十三歳の少年・少女が、知恵や福徳・美声をさづかるために、嵯峨法輪寺の虚空蔵に参詣するのは「十三参」、京都は四月十四日、(陰暦三月十三日)吉例の年中行事の一つであります。ついでながら、この短文も締切をすぎた十三月、つまり正月元日の夜の雪深い信州の山居での、私の書きぞめであります。いまさら美声は望みません、せめてことしも遅ればせの、よい知恵と、できれば少々の福分もさづかりますやうに——。

きのふは暮うちのたまつたゴミを焼くために、時をりふりしきる雪の合間を、庭の一隅に雪穴を掘りに出ました。ことしは根雪が遅れたためか、積雪はまだ一メートル余、こじつけでなく恰度雪の深さも一三〇センチほどでした。私がしやがめるほどのゴミ焼場をつくるのに、それほどの苦労はありません。それでも時どきそこでゴミを焼くために、そこまで雪道をつくり、いよいよ穴を掘りをへたころは、さすがに汗ばんでゐました。シャベルで、きしめく雪を切り出し、地面が見えてきたとき、私はハツと息をのみました。夏場はそこは山芝のたくましいのが天然の芝生をつくつてくれてゐる庭先なのですが、雪の下は枯れがれかと思ひきや、濡れてうつすらと青味をおびた芝の新芽らしいのが、枯芝にまじつてのぞけたからで。

そのあざやかさ。芝の新芽にしては、いかにも早すぎるやうにも思はれ、メガネをかけてゐなかつたので、よくある私の裸眼の誇張かとも思ひましたが、あるひは枯れおくれた芝の青みであつたのかもしれません。いづれにせよ、しかし濡れた地面が青味をおびてゐたことはたしかです。さうして私にはたしかに新芽に見えたのです。そこでぢかにゴミを焼くのにしのびなくて、穴のまはりの雪をくづし、新芽がやけどをしない程度にふりかけ、かるく踏みかためました。

君知るや
重たき粉雪の下のみどりを

また生き死にを

いい年をした大の男が、ゴミの燃える炎に髭かきなでて、どこかで聞いたことのあるやうな、そんなセンチメンタルな即興詩を誦してゐました。そして、よせばいいのに、また、

積雪の下のみどりを喜びぬ

とやつたものです。実は、そこのすぐ近くの夏場はいちめんの尾花のくさむらで、夏には、

八月一日、茅の初穂を喜びぬ

とやつてゐるのですから、ここにゐるとなんでも私は喜んでばかりゐるやうで。さぞかし長生きすることでせう。あんなに、東京にゐると、くだらぬ俗物の多すぎる俗世間に怒つてばかりゐるくせに。モズが窓のすぐそばで鳴いたといつては喜び、リスが物置をのぞいてゐるのを見ては喜び、春の雪のはざまに蕗の薹が宝石のやうにかがやいてゐるのを見ては随喜して粥を炊く。

けふ元日は、朝から山もすばらしい天気でした。朝まだき、陽もまだ上らぬころ、トイレの窓から落葉松林が海面からおよそ一三〇メートル下の海底のけしきのやうに澄みわたつて見え、あるひは巨大なレントゲンの照射をあびてゐるやうに青白く静まりかへつてゐる気配から、私はけふの好天気を予測したことです。案の定でした。起きてみると、外はいちめん眼が痛くなるほどの雪の反射です。尖端まで雪をのせた梢たちのきらめくこと！　まるでスパークしてゐるやうでした。

私は、しかし見なれた好天の雪景色よりも、きのふの積雪の下の青い芝の新芽が忘れられなくて、のぼせて即興詩などつぶやいたきのふより、かへつてけふはずつしりと、脳裡に新鮮でした。なにか暗示的でした。いつたい、なんだらう、あれは——。

自然の美しさにうたれて感じ入り、そのままそれを人事になぞらへる、あるひは人の世の喜怒哀楽を自然に事よせて諷喩する日本人の習性は、私にもぞんぶんにあるらしく、これもその「寄物陳思」にちがひありません。さうして私は十三年前の文芸科のことを思つたのです。一三〇センチの雪が、なんと十三年の歳月にすりかへられる時空奪胎。ふりつもつた雪といふ時間を掘りおこしてゆけば、そこは十三年前の青い文芸科の新芽でした。こじつけみたいに聞えませうが、さう思はば思へ、そんな思惑など屁でもない新鮮な、そして重厚な、私には偶然の一致だつたのです。

が、なにも気取ることはないので、歌謡曲ふうに歌へば、あれェは十三年まえッといふわけです。いつものよォに幕がァあきィ、といふのとは、いささか勝手がちがふが、ともかく文芸科の幕があいたのは事実です。事実上の専任は私ひとり、学生五十四名、あとはずらりと非常勤の先生がた。いやはや、面白かつたも面白かつた。今から思ふと気ちがひ沙汰、青々とした私は獅子奮迅でした。忙しいのなんのつて、猛烈の一語に尽きました。忙しくて、つらくていながら、それでたまらなく楽しい毎日だつたのです。それが私だけでなく、錚錚たる非常勤の先生がたも、口ぐちに楽しいとおつしやるし、誰よりも学生たちが、すごく楽しいですと、彼女らのことばでいふ。先生がたといへば、非常勤も常勤もあつたものでなく、わがことのやうに文芸科のことを心配してくださる、といつたふうでした。（私にあてがはれた枚数は、ここまで

でした。読みかへしてみて、なんとも甘い昔の吉田弦二郎先生の抒情文を行儀わるくしたやうなもの。しかもここまでは中途半端もいいところです。編集部にお願ひして、なんとか辻褄のあふ文章にさせてもらひたいと思ひます。電話で許しが出れば、つづきをあした書き足します。）《許しが出ました。さつそく書きつぎます。》

まつたく、原始的といふのか、あれは一種の古代社会でした。なにしろ、一二の非常勤の先生は、こんな楽しいところはないといつて、一升びんをさげてきては、おたがひ講義がすむと、その般若湯（ハンニヤタウ）を湯呑で酌みかはしながら、談論風発です。また別の非常勤の先生は、こんな楽しいところはないといつて、毎週アンパンを三十個も唐草模様の木綿の大風呂敷に包んできて、ゼミの学生にくばり、そのおこぼれに私たちもよばれる、といふふうでした。さうさう、一つしかない研究室、といふより談話室には、笹原さんといふ料理のうまい栄養科出身のお嬢さんがゐてくれて、初代副手として先生がたや学生たちの面倒を、実によく見てくれてゐました。

といふわけで、そのころアンパンは、たしか一個十五円だつたとはいへ、安い出講料がアンパン代になつてしまふのではないかと、学生たちが心配して私のところへ来たりしました。笹原さんをまじへて私たちは真剣にその対策を協議したりしました。そんなことにおかまひなしに、先生は相変らず、せつせとアンパンを持参されます。そして、ふつくらとした談論風発。

また別の先生は（少々胃弱を訴へてをられましたが）そば粉持参で、昼休は先生のそばがきに人垣つくつて、また談論風発。

照る日、曇る日、からい日、甘い日、べつに飲み食ひだけを楽しんでゐたわけはないので、その雰囲気が楽しかつたのです。そして、おのづからなる談論風発は、文学の話であり、すべて芸術の話題でありました。あまり楽しく貴重なので、出講日以外も私は文芸科に出かけました。そして実に多くのテーマを示唆されました。

現代ばなれのした雰囲気でした。当時でさへ、よそでは味はへない開放的な自由濶達の気風は、諸事「近代化」され、能率化されてきた学校機関では、もうこれからはありうべからざるものでありませう。いくら、その後の文芸科が、今もよそにはない雰囲気とはいへ、やはり一升びんぶらさげて出入りすることは、はばかられます。客観情勢がそれにそぐはぬ雰囲気です。

新鮮な新芽、文芸科の青い時代は、暫くつづきましたが、やがて若草になり、あるひは葉や幹をそなへてくると、そこに風が渡れば風にそよぎ、雨が降ればつめたく雨足にうたれる、といふ、よくもわるくも成長と変化が見られることは自然の理でありませう。どんなに若々しい個性も、それが若いだけ時代の波かぜを敏感に微妙に、受けないはずはありません。それは、いつたいに世の中の大学機関が面白くなくなつてきたことと、多かれ少なかれ軌を一にします。文芸科が五、六年たつたころから、例の大学騒ぎが全国を風靡します。文芸科がそんなものに巻きこまれるはずはなかつたが、微妙にその趨勢は大学騒ぎの風潮と軌を同じくしてゐるふうでした。

はて、大学騒ぎは、いつたい何をもたらしたでせうか。それは大学が抱へた多くの矛盾の爆発ではあつたものの、何一つとし

て矛盾を解決もせず、矛盾点を明確にさへできぬまま、学問より体制を、情熱より責任だけを、せせこましく神経過敏に気にする風潮だけを助長して、白つぱくれてしまつたやうです。一言でいへば、あれは徒労でした。むしろ堕落でした。理性の荒廃でありました。ニヒリズムによる精神の蚕食です。ふざけていふのではありません、般若湯を酌みかはして涅槃を語りあふ精神の光栄は、ヒステリツクな政治的合理主義のころもを被つたニヒリズムにはわかりますまい。すると〈精神〉は孤独を強ひられることになります。

もともと古代を好尚し、ゆゑに近代を、ことに現代的風潮を毛ぎらひする古風な私は、事ごとに反撥し、反面、何度隠遁しようと思つたかしれません。といふのは、さうした精神の領域でだけの反撥ではなかつたのです。すぐにでも文芸科はそのままで四年制になるはずでした。ところが、それこそ客観事情がそれを阻みました。実は私はそのためにこそ精魂をかたむけ、苦しみも楽しんできたのです。それが最初からの私の使命だつたのです。それがかなはぬとなれば、私の存在は否定されたも同然でした。ひそかな精神の至福と光栄もふみ荒され、しかも別の事情で最も具体的な念願もかなはぬとあれば、もう古代人的理想主義の立つ瀬はありません。

それなのに、さらに情勢は私に〈隠遁〉をなかなか許してくれませんでした。それどころか、こともあらうに情勢は私にお職を張らせ、おほげさにいへば、夜な夜な枕をぬらす年月がつづきました。古代人は現代をのろひ、ために少なからずみづからの精神をいぢけさせました。そのいぢけが、一番いやなことでした。そのくせ文芸科そのものへの愛着と愛情は変らずつづいてゐて、その矛盾に私は悩みました。おほげさでなく私は悩みぬきました。

甘えることになるので、誰にも相談しませんでした。しかし何年も悩んでゐると、いい加減くたびれてきます。いよいよ専任をやめさせてもらつたとき、私はくたびれはててゐました。「あいつはけしからん、文芸科を自分で作つてをきながら逃げ出すとは」「結局は投げ出したのさ」と、陰で私はいはれてゐることを知つてゐます。また「いつまでもベタベタして」と、これは私が非常勤で昔と変わず楽しく授業をさせてもらつてゐることを、暗にからかひ、遠くでさういふひとがゐることも知つてゐます。表むきは、そのとほりでせうから、私はつらいが、黙つてゐます。

とんだ書きぞめになつてしまひました。書き足さでもの、自己弁明になつてしまつたやうで。ですが、いい加減自己嫌悪に陥ることはやめて、ひがみをそのままうぬぼれにすりかへ、胸を張つて、これからは堂々と〈現代〉に悪態ついてゆかうと、居直りの覚悟を決めました。この書きぞめは、その覚悟が決つただけが、せめてものとりえで。

しかし、私は、きのふ、青いみどりの上でゴミなど焼くのではなかつたと、深く後悔してゐます。あれは、これからも私の生ける験の、大切なかたみなのですから。でも、二三日もすれば、また降りしきる雪が焼け焦げのゴミの跡かたもなく、あそこをうづめ尽してしまふことでありませう。